

水をめぐる紛争 - 西スマトラの水利事業 -

著者	中島 成久
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	11
ページ	177-212
発行年	2010-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/5149

水をめぐる紛争

——西スマトラの水利事業——

(国際文化学部教授)

中島成久

NAKASHIMA Narihisa

1 水資源の民営化と紛争

インドネシアのホテルに宿泊すると、最近ではどんな小さなホテルでも AQUA や ADES などのミネラルウォーターが飲み水として提供される。1970年代末からインドネシアと関わりを持つようになった筆者には、こうしたサービスが21世紀になってから一般的になってきたように感じられる。それまでは、小さいホテルでは煮沸した水を冷ましたものが、ポットに入れられて提供されるのが普通だった。こうして一般的になってきたインドネシアのミネラルウォーターであるが、それはどこで生産され、なぜこれほどまでに普及するようになったのか。こうした事柄を考えていくと、水利権をめぐるインドネシアの地方政治のありかた、アジア経済危機、水利事業の民営化（国際資本の参加）などの問題と深くかかわっていることに気がつくだろう。また、水利権をめぐる人びとの闘いがそこにあることも。

1974年の法律第11号（以下「1974年水利事業法」）は水利事業権を明確にした。この法律は、1960年の土地基本法の問題にのっとり、土地基本法のなかで抽象的にしか述べられていなかった水利事業権を詳

細に規定した。これはスハルト政権の開発路線に沿った法律で、灌漑事業や PDAM¹（地域水道公社）などの事業が可能になった。しかし、この法律では従来慣習的になされてきた住民による水源管理を認めないなど、問題点もあった。水源管理権を奪われた各地の住民が、地域の PDAM などに水源管理権の確認と政府による一方的な水利事業による補償を求めて政府と対峙してきたが、スハルト時代にはそうした声が聞き入れられることは稀だった。

さらに1973年に華人系企業家のティルト・ウトモによりミネラルウォーター・ビジネスが始まった。AQUA 社²である。生水の飲めないインドネシアで、ミネラルウォーターへの潜在的な需要があったが、今日、中国に並んでインドネシアがアジア有数のミネラルウォーター生産国になった背景には、1990年代のスハルト政権による国際ウォータービジネス資本の参加を積極的に促す政策があった。AQUA 社は1998年、フランスのデノン社と資本提携をおこない、国内シェアの90%を占めている。そのため、現在インドネシアでは、「アクア」とはミネラルウォーター全般をさす普通名詞になっている。

水という公共性の高い分野への外資の導入をさらに進めたのが、1997～98年のアジア経済危機である。この危機を乗り越えるためにインドネシアは、IMF や世界銀行からの融資を必要としたが、汚職にまみれ、経営効率の悪い PDAM をはじめとする水利事業に外国民間資本を導入し、より効率的で競争力の高いパフォーマンスを期待できる民間企業がインドネシアのウォータービジネスを担うようになった。ジャカルタ特別区水道公社の民営化はその典型である。

その結果、「1974年水利事業法」では対処できなくなり、水源の利用管理に関する2004年法律第7号（以下「2004年水源法」）が制定された。多くの反対を押し切って制定されたこの法律により、外国民間資本が堂々とウォータービジネスに参入できる環境が整った。「2004年水源法」では、水資源は住民の生活用水、灌漑用水として利用され

るだけではなく、「商品」として利用可能であることが明言された。その結果、たとえば、多くの水利事業者の集中する西ジャワ州のスラブミ Sukabumi 県では、過度な取水のため住民の生活と農業に大きな影響が出てきた。³

水は人類だけではなく、あらゆる生命の生存に必要な資源であるが、そうした公共性の高い資源管理はいかになされるべきなのか。以下、西スマトラにおける水利事業が紛争をもたらしているいくつかの事例を検討してみる。⁴

2 パヤクンブー市水道公社

1998年5月、スハルト退陣のニュースをテレビで知った西スマトラの住民も、開発のターゲットとされてきた共有地（タナ・ウラヤット）の返還、あるいは適正な補償を求める闘いに立ちあがった。「レフォルマシ Reformasi」（改革）の要求が、地方でも噴き出したのである。⁵

そうしたなか、リマプルコタ Limapuluh Kota 県パヤクンブー Payakumbuh 市水道公社の重要な水源になっている、スンガイ・カムニャン Sungai Kamunyang⁶で住民が実力行使も辞さない行動を始めた。スンガイ・カムニャンは、サゴ Sago 山（海拔2,438メートル）の北麓に位置し、パヤクンブー市から車で20分余りの距離にある。そこは、サゴ山中腹から流れるピナゴ Pinago 川と豊富な水量を誇る泉、バタン・タビット Batang Tabit がある。

1974年に設立されたパヤクンブー市水道公社 (PDAM Payakumbuh) は、この泉からの取水に際して、家庭用給水以外の取水は行わないこと、また取水にともなう補償を行なうことを約束していた。しかし実際には、その補償は一切支払われず、また泉に隣接して娯楽用プールまで建設されるなど、約束はまったく反故にされてきた。

1998年の「レフォルマシ」に至る間でも村はパヤクンブー市と水道

公社に対して、約束の履行を迫っていたが、ほとんど相手にされなかった。だが、1998年の「レフォルマシ」の高揚するなか、両者の間の緊張関係は一気に高まった。村の若者が、「要求が容れられないならば、ボタン・タビットの水路を封鎖する」という実力行使に立ちあがった。

スンガイ・カムニャンの住民の強硬な姿勢に驚いた市は妥協の道を探りだし、ついに売上高の5パーセントをスンガイ・カムニャンに支払うことになった。泉に隣接するプールの水の使用量に対する補償金も支払われるようになった。

パヤクンブー市の水源は、スンガイ・カムニャン以外にもう一か所ある。市の規模が拡大した結果、⁷1992年にパヤクンブー市にほど近い、スンガイ・ダレー Sungai Daleh からも取水するようになった。⁸スンガイ・ダレーには取水量の10パーセントを支払うことに同意した。同じように、ブキティンギ市に水を供給しているスンガイ・テナン Sungai Tenang でも、補償を勝ちとった。「闘いのやり方を学びにスンガイ・テナンの住民がやってきた」とスンガイ・カムニャン慣習法会議長のMM氏は語った。

水道公社からの補償は村の財政を潤している。2001年に従来の「ナガリ」（母系慣習法村）が復活したスンガイ・カムニャンの2003年の全収入は3億3千万ルピア（41,250ドル）⁹であるが、その3分の1は水道公社からの補償金が占めている。各ナガリへ中央政府から支給される一般予算は、村の広さと人口などで決まる。スンガイ・カムニャンの年間予算は大した額ではないが、水道公社からの補償があるという点で非常に裕福なナガリといえよう。ある村びとは、「スンガイ・カムニャンはパヤクンブーのブルネイだ」と誇らしげに語った。収入が多い分、村の公共施設の整備や貧しい子どもたちへの奨学金支給など、村の福祉は充実している。

これに対して、スンガイ・ダレーでは、水源を所有するスク（ナガリを構成する母系氏族）に40パーセント、ナガリに30パーセント、ナ

ガリ慣習法会議（KAN）に残りの30パーセントが分配される。この違いはどこにあるのか。スンガイ・カムニャンのナガリ長のB氏は、こう説明した。「スンガイ・カムニャンではオランダ時代にも、日本時代にも、バタン・タビットを全ナガリの共通の水源として利用するという慣習ができていたが、スンガイ・ダレーではそうでなかった。スンガイ・テナンも水源を村で共同管理する慣習はなかった。そこはオランダ時代からブキティンギ Bukittinggi¹⁰に水を引いていて、ブキティンギの唯一の水源である。しかし、スンガイ・テナンも補償金をナガリ全体のために使っている」。

スンガイ・カムニャンの闘いはまだ継続している。これですべての問題は解決したわけではなく、74年から78年までの利用料については解決したが、それから98年までの利用料については現在も係争中である。今でも村では当初の約束通りそれを支払え、と市側に要求しているが、村びとも現状にほぼ満足していて、新たな闘争を始めるモチベーションは持ち合わせていない。

自分たちのナガリ内にある水源の管理権をめぐってパヤクンブー市と対峙してきたスンガイ・カムニャンであるが、隣のナガリであるムンゴの住民に対しては激しい敵意を持っている。歴史的にミナンカバウのナガリでは、隣接するナガリ同士の境界争いがよくあった。現在の行政上はムンゴとの境界はピナゴ川であるが、スンガイ・カムニャンはそれを認めず、村から見てピナゴ川左岸域にあるムンゴの共有地権を否定している。¹¹現在ムンゴの住民は、その共有地内につくられた家畜庁の牧場で占拠された村の共有地権の回復を訴え、政府と激しく闘っている。スンガイ・カムニャンの住民がその牧場の労働者として雇用されているということもあって、彼らはこの問題では政府寄りである。そればかりか、ピナゴ川の上流部にあるムンゴの共有地へ給水するダムを破壊して水の供給を止めるなど、彼らの姿勢にエゴイスティックな側面があることは事実である。

水道公社から配給される水を使って、パヤクンプー市内で、ミネラルウォーターを作る家庭内企業がたかさんできている。「ガロン」(5ガロン、20リットル入るボトル)に詰めたり、「カップ」(240ミリリットル)だけを生産したりする。家庭内工場ではあるが、オゾンによる消毒と紫外線消毒を行ない、製品化する。ASRI という商品名の工場を見せてもらったことがあるが、写真撮影は「企業秘密を盗まれる」との理由で拒否された。こうした家庭内工場で作られるミネラルウォーター・ビジネスにどの程度の利益があるのかわからないが、商売として成立していることに驚く。

3 スンガイ・カムニャンにおける灌漑と水の管理

レンスケ・ローラ・ビーツェフェルトの『個人主義と相互扶助の間、ミナンカバウ村落における社会保障と自然資源』(2002年)の第6章「灌漑と飲料水への権利」で、スンガイ・カムニャンでの灌漑と水の管理の問題が詳細に検討されている。¹²1996年から97年にかけてのフィールドワークを元にしたその民族誌の要約を示しながら、以下問題点を整理する。

丘陵地に発達した他の西スマトラの村と同じく、スンガイ・カムニャンでは灌漑は大規模には発達していない。¹³西スマトラは雨量が多く、灌漑を大規模に発達させる必要性がなかった。また、雨季と乾季の降水量の差が少なく、それゆえ、ジャワやバリのような複雑な灌漑組織はここでは発達しなかった。灌漑組織は他の組織とは独立して存在し、灌漑組織を建設、維持、管理する政治組織は存在していない。スンガイ・カムニャンでの灌漑調査を困難にしたのは、小さい規模の灌漑組織が多数存在していたことと、多くの田が一カ所以上の水源から水を得ているという事実であった。

西スマトラでは1灌漑施設当たり100ヘクタールの面積をカバーし

ているのが普通であるが、スンガイ・カムニャンでは50ヘクタールにすぎない。それぞれの水路は別々の組織であるが、相互に関連している。田の多くは天水田(*tadah hujan*)であるが、それは灌漑が存在しないことを意味しない。雨が4日も降らないと、多くの田で水不足が起きる。西スマトラの降水量は多いが、丘陵地では水を得ることが困難である。多くの泉は低地部に存在しているので、高台にある田を所有する農民にとっては、とりわけ乾季の水不足は深刻で、他の人々との協力が不可欠となる。

水は種々の方法で供給される。単純なものは、灌漑水路の幹線水路に切り込みを入れて、水を引く方法である。もっと洗練された方法は、竹筒を使って水を引く方法である。さらに洗練された方法は「バラク(*paraku*)」と呼ばれる木や、コンクリートあるいは泥でできた分水装置(井堰)である。同時植え付けはスンガイ・カムニャンではすでにあまり実施されていないが、水路に直接面していない田を持つ農民は上部の田の田植えに合わせて耕作を始め、自然の高低差による水の流れに沿った給水に依存しなければならない。つまり、上の田で余った水を下の田に流すようにして、高低差に応じて順番に水を使っていくのである。

高収量品種米の導入以前は、灌漑は現在よりもより頻繁に行なわれていた。当時は年1回の耕作であったので、植え付け前の田は乾燥していて、田が鋤起こしできるほど十分に水を含むには相当量の水を田に引く必要があったからである。それゆえ、水路の清掃や修理にも相当な時間をかける必要があった。高収量品種米の導入で、同時植え付けが行なわれなくなった理由は、すべての農民に十分な水を一時期に集中的に供給することは不可能であったからだ。この近代的な耕作法が十全に機能するには、水が安定的に供給される必要があり、乾季には耕作できない。さらに、二期作が行なわれると、水の消費は単純に二倍以上になり、とりわけ乾季には困難さが増す。同時植え付けが行

なわれなくなると、人びとは他人がいつ植え付けるかに関心を払い、乾季が長くなると、雨季が来ると同時に植え付ける傾向が高くなるので、水をめぐる紛争が頻発する。

西スマトラでは水利権は他のインドネシアにおけるように厳格に規定されていない。誰も流れる水への所有権を主張できない。ただ用益権があるのみだ。泉の水はナガリの所有である。ただその水量が少ない場合には関係者が少ないので、ナガリが関与する割合は小さい。灌漑の上流部にある人は下流部にある人よりも水使用の優先順位が高い（上流優位）。しかし水使用の優先順位は同時に誰がその水路を作ったかにも関係する（古佃優位）ので、実際の優先順位は複雑である。他の地域とは異なり、スンガイ・カムニャンのナガリ慣習法会議（KAN）は灌漑組織には関与しない。¹⁴

おそらくある水路はある母系リネッジによって作られ、その「所有権」が代々継承されてきたのであろうが、実際多くの田が売却されたり、長期間質入れされている。水路の歴史について記憶がはっきりしている水路もあれば、経緯があやふやになってきた水路もある。水路の水の分与については一定の規則があったはずだが、質入れされた田が増えてきたので、一定の規則の存在は認められない。

水路の維持管理には多数の人々の協力が必要である。植民地時代の記録には、灌漑の維持管理組織が言及されている。その一つが、「トゥオ・バンダ Tuo Banda」で、灌漑組織すべてを管理する者である。ただこれは1920年代にはじめて文献に登場するので、植民地時代につくられた「新しい伝統」のようだ。スンガイ・カムニャンにそうした存在はいない。もう一つが、「シアック・バンダ Siak Banda」で、水路世話人と訳せるだろう。彼は水路の上流部から最初に枝分かれする部分までの水路の管理に責任を持つ。

公共事業省は水利利用農民組合（P3A）¹⁵を組織化しようとしている。P3Aは公共事業省の管轄外の灌漑の維持管理を図ることを目的

とした組織であり、農業省も関わっている。水の管理だけではなく、P3A は新しい農業技術の導入と植え付けの時期のコントロール、それに病虫害対策をも目指している。P3A は全インドネシア一円で同じ方式を導入する傾向があり、地元の特性はあまり考慮されておらず、地元農民には人気がない。P3A は西スマトラにおける灌漑事業で政府の存在を可視化させ、うまくいった P3A には助成があるということが魅力だろう。しかし多くの P3A はうまくいっていない。スンガイ・カムニャンにはたった一つの P3A しかなく、それは全く機能していない。水の全くないところで組織化されていて、何の役割も果たしていない。

スンガイ・カムニャン最大の灌漑組織はバタン・タビットであり、平野部の1007ヘクタールの田を潤している。1974年以来、パヤクンブー市水道公社と泉に隣接するプールへの給水事業が行なわれているので、この組織の水供給は容易な問題ではない。この組織は4つのナガリの境界にまたがっている。アンダレー（スンガイ・カムニャンの北）とムンゴ（東）もこの水源から水を得ている。¹⁶また、北に位置するアイル・タビット Air Tabit にも一部給水している。スンガイ・カムニャンの住民はこのバタン・タビットの水を飲料水にも利用していて、乾季にも困らないのであるが、アンダレーとムンゴの住民は深刻である。彼らはこの灌漑組織の下流域の利用者であるからだ。乾季になると、水利用のローテーションがなされるが、アンダレーとムンゴは夜しか利用できない。¹⁷

この組織には3つの主要な水路がある。バタン・タビットはすでに政府の所有であると主張する者もいる。1960年代からバタン・タビットの整備がなされ、1990年代に入ってやっと完成した。バタン・タビットにも P3A を作ろうとする計画があったが、うまくいっていない。LKMD（村協議会）などの組織も、あるいはプンフルーなどの慣習法の指導者もこの組織の運営には関与していない。水路の水漏れは

ひどい状態であるのだが、公共事業省も農民も、水路の管理補修には責任を負っていない。

アンダラス大学灌漑研究所に所属するヨナリザは、2000年以降に西スマトラで実施された灌漑管理事業改善政策について報告している。¹⁸ ビーツェフェルトの調査以降、西スマトラでの灌漑事業をみるうえで重要な指摘である。

この事業は、主に世界銀行からの融資により、全インドネシアでモデルケースを設定し、灌漑事業の改善を図ろうとしたプロジェクトであり、西スマトラではソロックとタナ・ダタルがモデル地区に選ばれた。

ヨナリザの調査によれば、こうした外部資金、政府主導の灌漑完全事業は「失敗」した。その原因としてヨナリザは、まず、地方分権化の流れに反した中央集権的な動きであるため、政策を受け入れる州、県、都市レベルで意思の疎通がうまくいかず、一貫した政策を示せなかったことがあげられる、と主張している。つぎに、計画の対象となった灌漑を管理する利用者組合でも、計画の全容が分からず、また農民のイニシアティブを尊重するよりも、上からの指示のよって計画を推進する傾向が強かったために、ちぐはぐな結果に終わることになった、という。

4 パダン・パリアマン県水道公社とSMS

パダン・パリアマン Padang Pariaman 県カパロ・ヒララン Kapalo Hilalang のゴムのプランテーションは800ヘクタールの共有地を占めていた。オランダ植民地時代にはオランダの民間企業の手で経営され、独立後は村民の手で管理されてきたこのゴム・プランテーションは、1965年の政変で軍の支配下に落ちた。その後、退役した軍人が経営するスルヤ・カルヤ社が設立され、パダン軍管区の重要な資金源となっ

た。しかし、1998年の「レフォルマシ」が高揚する激しい闘いの末、スルヤ・カルヤ社は業績が悪化し、同社に発給されていた HGU（事業権）¹⁹はパダン・パリアマン県に返還された。現在、このプランテーションの管理は無政府状態で、住民が好きに使っている。²⁰

州都パダンに近いパダン・パリアマン県（2003年統計で人口37万人）の水道公社の水源の一つが、カパロ・ヒラランである。カパロ・ヒラランの住民はその共有地の返還闘争には大きな関心を払ったが、タンディカット Tandikat 山（海拔2,438メートル）南麓から流れるピアマン川（Batang Piamang）にある水源（ルブック・ボンタ Lubuk Bonta）を PDAM が利用していることにはほとんど関心を払っていない（ように思われた）。2005年に開港したミナンカバウ国際空港はこの県内に位置するので、そこで使用する水もここから引いている。彼らはなぜあまり水源問題には関心を示さないのか、その理由を知りたいと思った。

カパロ・ヒラランでは水道公社以外に、AQUA のような巨大企業ではないが、3つのミネラルウォーター企業が存在していた。一社は倒産し、APU 社と SLING 社の二社が現在操業している。この二社はカパロ・ヒラランのナガリ全体に何らかの寄付をしているが、PDAM は寄付を「断った」そうだ。

パダン・パリアマン県水道公社（PDAM Padang Pariaman）で、スンガイ・カムニャンの事例を引きながら、水源のあるコミュニティへの貢献について尋ねたことがある。公社のディレクター氏は、開口一番次のように断言した。「水は国家が所有している。われわれは税金を国家に納め、逆にその税金が人びとに還元されているから、水源の住民に何らかの補償をする必要はない」。驚いたことにパダン・パリアマン県水道公社には18の水源があり、カパロ・ヒラランはそのほんの一つの水源であるということである。二か所の水源しかないパヤクンブー市との違いはこの水源の多さのためなのか。

ここの PDAM でも、水源で取水した水をそのまま家庭に配水している。逆にいえば、それだけ良質の水が出る水源しか利用しないというわけだ。水道管を通る途中で、50パーセント近くは漏水で消えているとのことだ。設備の老朽化は目に余る。

各家庭には1立方メートル当たり500ルピアで売る。基本料金は10立方メートルまで13,500ルピアで、各家庭では平均2万ルピアほどを使うとのことである。ミネラルウォーターを製造する三社の工業用水としては、1立方メートル当たり5,250ルピアで売っている。以下で述べる AUP 社は毎月平均5,000立方メートル使っている。水道用として取水した残りを水田の灌漑用に使っている。

全インドネシアのミネラルウォーター・ビジネスで、AQUA がダントツで一位、市场占有率90%。つぎに、Dua Tang や Ades (コカコーラ資本)、さらに Vit などの全国ブランドが数パーセントを生産している。ここで紹介する AUP 社はパダンに本社を置くローカルの会社であるが、そうした企業残りの数パーセントを生産している。AUP 社はすでに近隣の州にも市場を拡大している。

カパロ・ヒラランの水源、ルブック・ボンタの大口利用者がアグリミトラ・ウタマ・ペルサダ PT Agrimitra Utama Persada 社 (以下 AUP 社と略称)、製品ブランド名 SMS (Sumber Minuman Segar:「リフレッシュできる飲み水」の意味) である。パダン在住のジャワ人と中国人の混血であるスヒント・サディキン Soehinto Sadikin 氏によって1980年代末に創業された同社は、2003年ルブック・ボンタの水を利用して SMS を販売し始めた。スヒント氏はもともと、アンダラス大学工学部の教員をしていたインテリであり、学問からビジネスの世界への転出に成功した稀な人物である。

この地を選んだ理由は、ミネラル分の多い汚染されていない良質の水が得られることであり、またパダンに近いなどの地理的な好条件を備えていると判断されたためである。

AUP 社は西スマトラ以外にもリアウ州で生産、販売網を拡大し、従業員総数300人の中堅企業としての地位を築きつつある。そのラベルには「シンガラン山系の水使用」と謳っているが、正確ではない。タンディカット山南麓の水を使用しているが、その点を指摘すると、「タンディカット山では誰も知らないから、有名なシンガラン山の名前を使った」とのことである。

AUP 社はカパロ・ヒラランに二つの工場を持っている。二工場のうちの一つは240ミリリットル入りの「カップ」専用の工場である。裏の工場では20リットルのガロン、1.5リットル、600ミリリットルの容器を作っている。400人いる工場の従業員も別々の組織に分けられている。以前は3年の契約であったが、最近はほとんど1年ごとの更新となり、更新されない者もいる。仕事は3交代制で、8時間労働。夜勤だと3000ルピアの手当がつく。給料以外にインスタントコーヒーが支給される。週6日働き、1回の休みが取れる。労働者の30パーセントが女性、70パーセントが男性。2007年時点で、月平均96万ルピア²¹の収入がある。日給が32,000ルピアで、15日ごとに給与が支払われる。この給料は正社員のものである。²²

注3で言及した拙稿、「発展するウォータービジネスの陰で起きていること」のなかで西ジャワ州スカブミ県チダフ、チチリュグ両郡のミネラルウォーター企業での労働者の平均賃金と比べると、若干「いい」。

5 水戦争

2008年末、パダン・パリアマン県の県都であったパリアマン市が、行政上県と同等レベルである「コタ・マディア」に昇格すると、パリット・マリンタン Parit Malintang 村が、新しい県都になった。そして、この新県都に給水するために、ルブック・ボンタから水を引く計画が

発表された。しかし、この計画はルブック・ボンタの水源から灌漑用水を得ている地元住民の大きな反発を招いた。カパロ・ヒラランを筆頭に4つの郡に属する8ナガリの農民である。1470haの水田が影響を受ける4つのナガリの農民が「4ナガリフォーラム」を結成し、反対運動に乗り出した。もしこの計画が実現すると、この灌漑用水で給水される2500ヘクタールの水田が大きな影響を受ける。

カパロ・ヒラランを含めた4つのナガリ（シチンチン Sicincin、スンガイ・アサム Sungai Asam、ルブック・パンダン Lubuk Pandan）がルブック・ボンタから灌漑水路を開いたのは、1880～1890年頃だという。時のナガリ長、アング・パロー・シカカン Angku Paloh Sikakang が指導した。現在では4つのナガリの1440ヘクタールの水田と内陸での養殖農家の池に給水されている。ピアマン川に設置された灌漑施設は、タリ・バンドル Tali Bandar と呼ばれる水路を通して、4つのナガリ1470ヘクタールだけではなく、他の4つのクチャマタン、4つのナガリの約1000ヘクタールにも給水されている。この灌漑施設全体を、シチャウン Sicaung 灌漑と呼ぶ。

タリ・バンドルの水路は、まず、カパロ・ヒララン、シチンチン、スンガイ・アサム、ルブック・パンダンへ給水する水（1440ヘクタール）と、それ以外の4つのナガリ約1000ヘクタールへ給水する水に分かれる。4つのナガリへ給水する水は、まずカパロ・ヒラランとシチンチンの二つのナガリの水田を潤すが、スンガイ・アサムとルブック・パンダンの二つのナガリには十分に水がいかない。そこで、シチンチンで堰を設け、昼間と夜の給水を分けている。朝の6時から午後6時までをカパロ・ヒラランとシチンチンが利用し、午後6時から翌朝の6時までをスンガイ・アサムとルブック・パンダンが利用する。²³

2004年の「水源利用法」によって、P3A（Persatuan Pemakai Putani Air 水利農民組合）が作られた。P3Aの各成員は、IPM Air（Iyuran Petani Memakai Air 水利用税）を負担している。このお

金は水路の補修などに使われる。1984年タリ・バンダルの灌漑水路がコンクリート製の水路に変わった。この資金は単年度政府予算から出た。²⁴

以前は、「トゥオ・バンダ Tuo Banda」という職の水路管理人が各ナガリにいて、彼が利水の調整を行っていた。しかし、トゥオ・バンダは現在、政府の非常勤職員として、P3A の中の一職階となりあまり重要な役割を果たせなくなった。²⁵

現在、ルブック・ボンタの水源に二本の水道管がある。一本は、1989年設置されたパダン・パリアマン県水道公社のパイプである。毎秒160リットルの取水能力がある。

さらに、1998年、PAU 社などのミネラルウォーター企業へ水売るために、毎秒200リットルの取水能力のある直径200ミリの水道管が設置された。

ところが、新県都に指定されたパリット・マリントンへ給水する水道管工事が2009年5月から始まった。毎秒500リットルの取水可能な直径が400ミリの大型の水道管である。一度ポンプが取り付けられたものの、激しい抗議で、水道管を置いたままで、まだ設置はされていない。

2009年10月、西スマトラ地震（9月30日発生）の3週間後に、反対運動を指導するアベル・タスマン Bp Abel Tasman 氏にインタビューをすることができた。ルブック・ボンタから新県都のパリット・マリントンまでの約12キロの距離に水道管を設置し、毎秒500リットルの取水が行なわれるという計画が発表されてから、まず最も影響を受ける4つのナガリの農民が「4ナガリフォーラム」を結成した。しかし、その後「シチャウン」灌漑に依拠している残りの4つのナガリも参加するようになったのだが、すでに「4ナガリフォーラム」という名称で活動を始めていたので、名前の変更は行っていない。

アベル・タスマン氏の話では、「カパロ・ヒララン、シチンチンでは、

住民の60パーセントが水田耕作に従事し、10パーセントが川魚の養殖農家。15パーセントが自営業で、残りが給料生活者。だから、水は重要なのだ。」

彼の計算では、水田1ヘクタールにつき、毎秒1.2～1.5リットルの水が必要。それを2500ヘクタール分に換算すると、毎秒3000～3750リットルが必要となる。ところが政府の試算では、その3分の1以下しかない（注24の2009年8月11日付書簡参照、「シチャウン灌漑の水は、毎秒0.952リットル」）。

これでは、水田耕作を続けられない。さらに、1000ヘクタールの水田では、水道公社とミネラルウォーター会社用の取水で、大きな影響を受けていて、水不足が目立っていた。われわれの1470ヘクタールでもすでに100ヘクタールの水田で水不足が生じている。この上「毎秒500リットル」の取水が行なわれると、農民にとっては死活問題となる。

2009年7月3日の「シンガラ紙」は、「水道公社の計画を撤回せよ、農民らがパダン・パリアマン県議会へデモ」²⁶と題する記事を掲載している。シンガラ紙によると、「7月2日、4つの村の農民数百人がパダン・パリアマン県議会前でデモを行ない、パリック・マリントンへの給水計画を撤回するよう要求した。その計画が実現すると、4つの村の灌漑用水が不足し、農民が苦境に陥る」とのことである。「乾季の今、4つの村の水田の1,470ヘクタールで水不足が起きている。もしこのまま計画が進めば、さらに数百ヘクタールの水田で水不足が起きる」と彼らは主張した。

デモは現地時間午前11時から始まり、平和的に行なわれたが、POLRES（州警察指揮下の県警察）とSATPOL PP（県知事指揮下の警備隊）の厳重な監視下に置かれた。デモ隊には多くの女性もいた。彼らはポスターも持たず、シュプレヒコールを上げるだけだった。彼らの要求を、県幹部数人が聞いていた。ある幹部は、「4村の農民の要求は十分理解した。県知事とこの問題について協議する。われわれは

この問題でこれ以上紛糾することを望まない」と語った。

しかしながら、当局はこの計画を撤回する考えがないどころか、何としてでも推進していこうとしている。県議会幹部は「計画が十分理解されていないので、計画の周知徹底の必要性がある」との見解を示した。また、県知事は4つの村のナガリ長や村の要職にある人びとと会合を開き、「民衆は計画が推進されることを望んでいる。いろんな噂に流され、安易な行動に出ることは許されない。とりわけ、7月8日の大統領選挙を控えている状況では、社会を不安に陥れるような行動は絶対に許されない」と語った。²⁷

2009年10月末現在、パダン・パリアマン県はその計画を変更する意思を表明していない。むしろ、ナガリ長や郡長、ナガリの指導者に対して、計画の続行を表明し、反対勢力のとん挫を狙っているかのような態度がみられる。住民はこの問題を、「水戦争（Perang Air）」と呼んでいる。

この「水戦争」のもう一方の当事者が、新県都になったパリット・マリントンの住民である。

カパロ・ヒラランの南南東、12キロ。パダン・パリアマン県の中心部に位置するというよりは、むしろソロック県の県境に近い、といていい。直線で10キロ足らず。すでに内装を残して建物は完成している知事舎は、リンボ・カラム Rimbo Kalam（暗い森）という地名の場所にあり、今なお、森の中にある。幹線道路から舗装もされていない道を走り、1.5キロというが、もっとあるだろう。周りは田んぼだらけ。稲の収穫後西瓜を植えた人たちが、収穫をしていた。新イブ・コタが決定されたのは、2008年の終わり。現在二期目の最後を迎えるブパティの Muslim Kasim 氏の母親は、新知事舎のリンボ・カラムの出身。彼の妻もそこからやや遠いが、このパリット・マリントンの出身である。新県都の選定において、知事の個人的な思惑が反映されて

いなかったとはとても言えない。

当初、6人の慣習法指導者 NiniK-Mamak たちは全員、新県都が移転してくることに賛成した。ところが、補償額を提示しないまま、「土地の明け渡しだけは先にせよ」と迫る地方政府の姿勢に二人の指導者が反対した。彼らは、土地の明け渡しを要求されている自分たちのクボナカン（自分の姉妹の子供たち）のために、先に保証額を提示するよう迫った。これは全くまっとうな話で、彼らに理はある。

ところが、彼ら二人のニニック・ママックは、ナガリ慣習法会議（KAN）の決定により、その地位を解かれ、ナガリから追放された。そしてナガリに復帰する条件として、125万ルピアの罰金とヤギ1頭をナガリに提供すること、それから、同じカンボンの村人に食事を提供することが必要だと言いつ渡された。私がインタビューをした元ニニック・ママックのS氏は、心底怯えていて、自分の名前を名乗ることさえ、よしとしなかった。名前を公表されることで、新たに別の災難が降りかかることを恐れていた。西スマトラ地震のため彼の家は全壊し、空き地に仮小屋を建ててそこで生活していた。もうこれ以上の不幸は「ごめんだ」と言わんばかりの表情であった。

新知事舎建設で立ち退きを余儀なくされた人びとに、1平方メートル当たり1500ルピアという安い補償金しか支払われていない。1ヘクタールの土地があったとしても、総額たったの1500万ルピア（2009年10月の時点で15万円、2000ドル）、2ヘクタールで、2000万ルピア（2009年10月時の換算額で20万円、2300ドル）。しかも、まだ半額しか払われていない。かのS氏にはまだ支払われていない。彼とその親族に本当に補償金が支払われるのかどうかさえ分からない。それほどまでに、新県都の移転がここパリット・マリントンの住民には「おいしい」話となっている。現在でこそ二束三文の土地だが、数年後には大幅に値上がりすることは必定であるからだ。

2009年10月20日の午前、西スマトラ地震の被害の大きいパダン・パリアマン県タンディカットの被害状況を視察に行った帰り、お昼過ぎに、ある食堂で昼食をとった。すると、われわれの前に座っていた7～8人の Satpol PP(Satuan Polisi Pamong Praja)〔県警備隊〕の中のボスが、突然トランシーバーで誰かと話し始めた。数分間交わされた会話の中身は衝撃的なものだった。ルブック・ボンタで数人の村人が、ポンプを破壊しようとしているとのことで、それにどう対応したらいいかという問題であった。Satpol PP は、身分は制服の公務員で、警察とはいっても、県知事が彼らを指揮する。だから彼らには逮捕権はない。警察機構とは別組織なのである。そこでボスは、連絡してきた人に向って、「だれか名前の分かる人物はいないか、できれば写真を撮ってほしい」と頼んでいた。写真を証拠に、警察に突き出し、逮捕してもらおうという算段であった。

数日後、カパロ・ヒラランを訪れこの事実を話すと、村びとが取水用ポンプを引き上げたが、当局によってすぐに修復されたとのことであった。一色触発の危機は迫っている。



写真1 改修工事を受けているバタン・タビット灌漑用水。背後の山はサゴ山。



写真2 ビナゴ川に敷設されたムンゴ用の小規模ダム。左側の水路を通してムンゴの共有地に給水される。



写真3 バadan市内のホテルに搬入される、ミネラルウォーターSMS。



写真4 家内工業で作られるボトル飲料水「アスリ」。オゾンと紫外線による消毒済みと表記されている。



写真5 ルブック・ボンタの水源にあるバダン・バリアマン県水道公社の水道管。手前の管は古いもの。



写真6 シチャウン灌漑水路。



写真7 親県都に給水するために道路わきに置かれた給水管。直径40センチメートル。

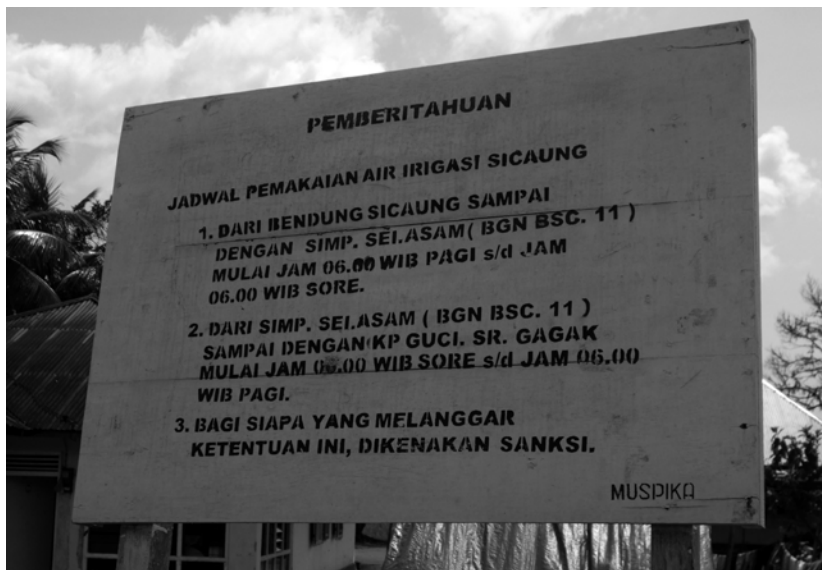


写真8 シチャウン灌漑用水の水利用の協定を告示した掲示版。



写真9 シチャウン灌漑水路で日中と夜間の給水を制御する水門。立っているのは、元共有地返還運動の闘士のT氏。現在は、県警備隊になることを強要された。

[注]

- 1 Perusahaan Daerah Air Minum
- 2 正式には、PT AQUA Golden Misissippi。
- 3 この項では、次の資料を参照した。Controversy on the Commercialization of Water in Indonesia, INFID(International NGO Forum on Indonesian Developmenet) News, August , 2005, pdf. また、ジャカルタ市特別区水道公社の民営化とスカプミにおけるウォータービジネスと地域社会への影響については、拙稿、発展するウォータービジネスの陰で起きていること——民営化と地域社会への影響、「インドネシア ニュースレター」68、日本インドネシア NGO ネットワーク (JANNI)、43 - 53 頁、2009 年 8 月、参照。
- 4 西スマトラでの調査は、筆者を代表者とする科学研究費基盤研究 (C)「インドネシアの水ビジネスと土地紛争」(2007 ~ 2010) に基づく。
- 5 拙稿、*Tanah Ulayat* and the *Pembangunan* Issues in West Sumatra, 「異文

- 化」(論文編)第4号、法政大学国際文化学部紀要、31 - 52 頁、2003 年
- 6 ミナンカバウ語では、セイ・カムニャン Sei Kamunyang と呼ばれる。
 - 7 リマプルコタ県の人口は 31 万人 (2000 年統計)、パヤクンブー市の人口は 10 万人 (2004 年統計)。
 - 8 水量はスンガイ・ダレーの方が豊富であるが、「水質はバタン・タビットの方がはるかにいい。ある調査によると、イタリアのどこかに次いで世界第二位の水質だ」と地元の住民は胸を張る。だが、パヤクンブー市水道公社によると、「水質は同じ」とのことであるが、とにかく、バタン・タビットの水はそのまま飲めるほど良質の水である、ということだ。

実は、パヤクンブー市水道公社の水源は 3 つある。しかし、シカムルンチン Sikamuruncing からの取水量は前の二者に比べると無視できるぐらい少ない。

2007 年 12 月 30 日から 2008 年 1 月 30 日までの各水源からの取水量を示しておく。

水源	取水量 (m ³)
Batang Tabit	280,980
Sikamuruncing	19,163
Sungai Dareh I	194,990
Sungai Dareh II	15,300
合計	510,433

この取水量は、スカブミ県チダフ郡水道公社の年間取水量に匹敵する膨大な水をわずか 1 ヶ月間で取水している。単純に計算すると、1 年間で、612 万立方メートルの取水量である。それは、2006 年スカブミ県チダフ郡チリユグ郡の 1 年間総取水量 614 万立方メートルと同量である。注 2 の拙稿参照。

- 9 当時のレートでは、1 ドルが約 8000 ルピアである。
- 10 当時はフォードコック Ford Kok と呼ばれていた。
- 11 “Peraturan Nagari Sungai Kamunyang, Nomor: 01 Tahun 2003, Tentang Pemanfaatan Tanah Ulayat Nagari” の第 3 章 第 5 条 A で “Tanah milik Nagari yang telah diserahkan kepada Pemerintah sebagai Hak pakai yakni yang terletak di Timur Batang Pinago smapai Labuh Gunung.” (政府によって認められたナガリの共有地は、ピナゴ川東部からラブ・グヌンにまで至る) と明確に規定されている。

- 12 Renske Laura Biezeveld, Right to Irrigation and Drinking-Water, in *Between Individualism and Natural Resources in a Minangkabau Village*, Eburon, Delft, 2002, pp197-221.
- 13 ビーツェフェルトの見解は、基本的にアンブラーの博士論文、『アダットと援助、西スマトラにおける小規模灌漑』（John Ambler, “Adat” and Aid: Management of Small-Scale Irrigation in West Sumatra, Indonesia, UMI Dissertation Service, 1989）に大きく依拠している。アンブラーは、ソロック県のリントウ・バウ村でのフィールドワークをベースに議論しているが、そこはインド洋に面するランタウ地区のミナンカバウとは区別されるダレックと呼ばれるミナンカバウ高地地帯に属する。そこは火山で形成された扇状地に集落が発達していて、地形的にも大規模な灌漑施設が発達できない。これに対して、スマトラ島の脊梁山脈の西側は、インド洋からの雨雲が雨となって降る世界的にも最大の多雨地帯となっている。山間部では年間降水量が4000ミリメートルにも達する。この豊かな水がインド洋にそそいでいるため、ランタウでは広域灌漑施設がみられる。
- 14 山本早苗は琵琶湖に面する棚田の水路利用において、下流部の利用者に水路利用の優先権が与えられている（下流優位）珍しい事実を紹介している。棚田における水の共同性、琵琶湖辺集落・仰木——1200年の歴史を刻むムラ、秋道智彌編『資源とコモンズ』資源人類学08（内堀基光総合編集）、弘文堂、2007。
- 15 Perkumpulan Petani Pemakai Air
- 16 スンガイ・カムニャンのムンゴに対する「優位性」はこのことからもうかがえる。上流優位の原則で、バタン・タビットの水を利用するムンゴの住民は、スンガイ・カムニャンの意向には逆らえなかったとみられる。ムンゴの紛争で、主な紛争当事者は、ムンゴ上部の住民で、彼らの生業は畑作や養殖業である。これに対して彼らの闘いにムンゴ下部の住民は関心がなく、時には敵対的であった。ムンゴ下部の生業は水田耕作が主で、彼らは重要な水をスンガイ・カムニャンに依存している。ムンゴ紛争の力関係にはこうした水資源をめぐるナガリ間の関係も反映されている。
- 17 先の山本によると、仰木地区では、「昼水、中番、夜水」のように時間帯ごとに水使用の順番を決めている。ただ、夜水は冷たいので、稲の生育には好適ではない。
- 18 Yonariza, Implementation of Irrigation Management Reform Policy under External Support: Sustainability Question, A Preliminary Observation in

West Sumatra, Indonesia, Paper prepared for RCSD Conference “Politics of the Commons: Articulating Development and Strengthening Local Practices, July 11-14, 2003, to be held by Regional Center for Social Science and Sustainable Development. PDF.

19 Hak Guna Usaha

20 拙稿、On the Legitimacy of Development :A Case Study of Communal Land Struggle in Kapalo Hilalang, West Sumatra, Indonesia, *Journal of International Economic Studies* (2007), No.21, 145-160, The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University.

しかし、県知事の反撃も始まっている。カパロ・ヒラランの闘争を長く指導してきた T 氏は次のように現状を説明した。

「事業権 HGU は地方政府が持っているので、いつ何時、別の会社に移転されるかもしれない。その手始めなのか、2006 年、5 ヘクタールの土地に Buah Naga を植えたいと言ってきた。1 Kapling(2500 平方メートル) 当たり 70 万ルピアをナガリに支払ったが、翌年にはさらに広い土地を求めてきて、1 Kapling (今度は 5000 平方メートル) 当たり、800 ～ 1000 万ルピアの補償金を提示してきた。このプロジェクトは、地方政府のプロジェクトだとは言いが、はっきりしない。おそらく、プバティの“個人的な投資”事業だろう。このお金をだれが貰っているかはっきりしない。村の指導者 (Tokoh Masyarakat) が貰っているようだ」。しかし、誰がいくらもらい、その後どうなったかは T 氏も知らない。この事業はまだ何の結果も生み出していない。苗木をやっと植えた程度で、将来どうなるかは全くの未知数。

* Kapling とは「区画」という意味で、定まった広さを意味するわけではない。

スンガイ・カムニヤンのナガリ共有地の利用の詳細について、“Peraturan Nagari Sungai Kamunyang, Nomor: 01 Tahun 2003, Tentang Pemanfaatan Tanah Ulayat Nagari” (ナガリ共有地の利用について) の第 18 条で次のように述べられている。

(1) 共有地を利用したいと思うナガリの構成員はママックに先に知らせ、その後ナガリ政府に文書で申し込みをすること。

(2) 共有地を利用したいと思うものはすべて、ナガリ政府にその旨を申請する前に、村慣習法会議 (LAN) の同意を得ること。

次に、共有地を利用したい者に与えられる土地の広さについて、第 9 条でつぎのように規定されている。

(1) 共有地を利用したいと思う者は一人のKK(家族長)ごとに最大0.25ヘクタールの土地が与えられる。その中には、ポンドックの広さも含まれる。さらに、第10条で以下のように規定されている。

(1) 共同して共有地を耕作する者は、最低10家族・世帯の構成員を持つこと。

(2) 一つの耕作集団には最大4ヘクタールが与えられる。

また、第11条は資本を持つ者の条件として、「最大10ヘクタールの土地が供給される」と規定されている。

しかし、共有地を利用する者にはつぎのような「義務」もある。

1 共有地を利用する者はすべて、利用によって生じた利益(Bunga Tanah)をナガリに支払う義務がある。

2 利益はその広さに応じて決められる。

21 1ドル8000ルピアで計算すると、120ドルほどになる。

22 Company Profile, PT. Agrimitra Utama Persada, Industri Air Minum Dalam Kemasan Bertemu. それに、工場従業員とのインタビューによる。

23 2009年4月28日付の「公告(INSTRUKSI)」でつぎのように宣言されている。「2x11 Enam Lingkung(Dua Kali Sebelas Enam Lingkung)灌漑技術実施チームは、シチャウン灌漑用水を利用するすべての農民に以下説明する。

1 2009年4月28日にドゥアカリ・サブラス・ウナム・リンクン郡長舎において郡指導者会議が開催され、シチャウン灌漑用水を利用するすべてのナガリ長、ナガリ指導者、農民組合指導者が出席し、以下のような水の分配案が示された。写真8参照。

A カパロ・ヒラランのコロン・タロ Korong Tarok からシンパン・スンガイ・アサム Simpang Sungai Asam までは、午前6時から午後6時までの給水とする。

B シンパン・スンガイ・アサムからコロン・カンブン・グッチ Korong Kampung Guci とサラン・ガガ Sarang Gagak までは、午後6時から午前6時までの給水とする。

2 上記の内容は、水田農民だけではなく、養殖農民によってもしっかりと実施されること。

3 この公告に反する行動には関連する法令違反として処罰されること。

4 この公告は2009年4月28日から実施されること。」

すると、2009年4月28日以前はこうした協定を存在していなかったことになる。それだけ、水不足が深刻になってきたことの証明である。

24 Dana APBN (Angaran Pendapatan dan Belanja Negara)

- 25 3で引用したビーツェフェルトによれば、「トゥオ・バンダ」という名称は伝統的なものではなく、オランダ時代に「創造された」職階であるという。
- 26 “Hentikan Proyek PDAM” “Petani Demo ke DPRD PD. Pariaman”, Singgalang, July 3, 2009.
- 27 この間の経緯の詳細は以下の通りである。

2009年6月1日書簡

シチャウン灌漑利用者に関して

パダン・パリアマン県知事、DPRD議長、PDAM社長、警察、建設会社社長殿

拝啓

2009年5月17日カバロ・ヒラランのナガリ長舎において行なわれた郡指導者会議において、県と水道公社はルブック・ボンタから毎秒200リットルの新たな取水を行なうことが決定された。

この決定に対して我々、シチャウン灌漑を利用している4つのナガリの農民は強く反対する。現在でも、農業用水以外に毎秒80リットルの取水が行なわれていて、それで200ヘクタールの水田で水不足が起きている。この計画が実施されれば、さらに1000ヘクタールの水田で水不足が起きる。

こうした事態になる恐れがあることを関係各位に知っていただきたい
敬具

「シチャウン灌漑用水利用4ナガリフォーラム」議長

アベル・タスマン

2009年6月30日付書簡

要求

西スマトラ州協議会議長殿

シチャウン灌漑用水での水道公社の新事業により、当灌漑用水を利用して
いる住民は大きな負担を被る虞がある。

1 水道公社のコンサルタントが行なった調査では、シチャウン灌漑用水の
水量は毎秒2800リットルで、雨季には3200リットルに達するとされている。
しかしこれは実情に合わない。2009年6月18日の我々の調査では、スンガイ・
アサムのRimbo Bakungやシチンチンの水田では水が不足している。我々の

調査では、毎秒 1195 リットルの水量しかなく、1470 ヘクタールの水田に必要な毎秒 2205 リットル（1 ha 当たり毎秒 1.5 リットル必要、 $1.5 \times 1470 = 2205$ リットル／毎秒）には程遠いのが現状である。

2 現状では水道公社は毎秒 80 リットルの取水を行なっていて、一部の地域では水田 50 ヘクタールで水不足が起きている。この上に、毎秒 200 リットルの取水が行なわれたならば、200 ヘクタールの水田で水不足が起きる。

3 3つのミネラルウォーター会社（ELBI、SLINK、SMS）が存在し、灌漑用水を利用している。

4 この計画策定の前に、十分な影響調査が行なわれていない。

以上のような理由で、シチャウン灌漑用水を利用している「4 ナガリフォーラム」の農民は、当局がその計画を至急停止するよう要請する。

我々の希望を表明するために、以下の日程で、大衆的な意思表示を行なう。

日時 2009 年 7 月 2 日午前 10 時

場所 西スマトラ州協議会議事堂前

参加者 200 名前後

以上を表明する。

議長 アベル・タスマン

2009 年 7 月 2 日付声明

要求書

シチャウン灌漑用水を利用しているわれわれ「4 ナガリフォーラム」（クパラ・ヒララン、シチンチン、スンガイ・アサム、ルブック・パンダンの 4 ナガリで構成）は、以下のことを要求する。

ルブック・プンタでの水道管敷設工事を即時停止すること。

この要求が満たされることを我々は要求する。

フォーラム長

A b e l T a s m a n

2009 年 7 月 9 日付書簡

民衆の要求について

パダン・パリアマン県知事殿

2009年7月27日付に Sicaung 灌漑用水を利用している水田農民と養殖農家の代表である「4ナガリフォーラム」は州協議会を訪れ、PDAM パダン・パリアマンが計画しているルブック・ボンタでの新たな取水は、水田耕作農民と養殖農家の水利用に大いなる支障を与えることを危惧していることを表明した。

「4ナガリフォーラム」の代表と協議した結果、州協議会は知事に以下のことを要請する。

- 1 シチャウン灌漑用水での PDAM による新たな取水計画を一時凍結すること。
- 2 州協議会はあらゆる観点からの考察を行ない、取水計画が関係する民衆とパダン・パリアマン県全体の利益にかなうよう十全な計画で実施すること。

西スマトラ州協議会

2009年7月15日付書簡

要求

西スマトラ州協議会議長・代議員殿

水道公社は Kec 2 x 11 Kayutanam のカパロ・ヒララン、タロ地区にあるシチャウン灌漑用水から、毎秒 500 リットルを取水し、単年度国家予算の資金 12 億 8000 万ルピアを受けて、12 キロ離れたパリット・マリンタンまで給水する計画を立てている。この計画に対してシチャウン灌漑用水を利用する農民は「4ナガリフォーラム」の下、大いなる影響を受けることを懸念する。

- 1 1989 年パダン・パリアマン県水道公社は毎秒 180 リットルの取水を開始
- 2 1998 年毎秒 3 つのミネラルウォーター会社用に毎秒 300 リットルの取水を開始。
- 3 現在毎秒 500 リットルの取水計画がある。

現在、シチャウン灌漑には 2 つの水門があり、一つは 4 つのナガリに向けて流れ、もう一つは他の 4 つのナガリに向けて流れる。

我々の調査では、現在シチャウン灌漑用水の水量は、毎秒 1195 リットルで、1470 ヘクタールの水田を潤すには、不足している。もし、水道公社の新しい給水管が設置されれば、1470 ヘクタール全体で水不足が起きてしまう。

こうした事情から、「4ナガリフォーラム」はすぐさまこの計画が中止されることを要求する。

「4ナガリフォーラム」議長

2009年7月15日付書簡

バダン・パリアマン県水道公社の新規事業の即時停止の要求

インドネシア共和国大統領／国民協議会議長・議員殿

拝啓

「4ナガリフォーラム」に参集する民衆は我々に降りかかった災難について大統領閣下と国民協議会議長閣下に訴えたい。

バダン・パリアマン県の県都がパリアマン市からパリット・マリントンへ移転したので、いろいろな施設も同時に移転するが、その一つに飲料水施設がある。

バダン・パリアマン県政府は直径40センチメートル、毎秒500リットルの取水能力のある給水管をルブック・ボンタの水源に設置し、それを12キロ離れたパリット・マリントンまで引く計画を実施している。この計画には国家単年度予算が使われ、ベンクルー州のサビナ・ジャサ・コントリンド社が事業を12億8000万ルピアで請け負っている。計画は2009年4月より進行している。

ルブック・ボンタの水源はすでに4つのナガリ、1470haの水田に水を供給しているが、この計画が実現すると、多くの水田が水不足を生じる恐れがある。

さらに、ルブック・ボンタの水源を利用している3つのミネラルウォーター会社は民衆に対していかなる貢献もしておらず、民衆は水を取られるだけである。

われわれはすでに7月2日バダン・パリアマン県協議会議事堂前において、事業を即時中止することを訴えてきたが、県知事はその日の夜4ナガリ長と3人のチャマットに対して、事業継続の意思を表明した。2009年7月14日に県知事は西スマトラ州PSDA (Pengelolaan Sumber Daya Air〔水源管理局])に対して、事業継続の必要性を訴えている。

これまでの経緯をかんがみると、この事業は県知事のムスリム・カシム Muslim Kasim という一個人の恣意的な野望に基づいて行なわれていることは明らかである。

そのためにわれわれは、大統領と国民協議会議長／議員の皆様に対して、我々の苦境を理解され、知事の暴走を法律に基づいて停止していただきたい。
敬具

「4ナガリフォーラム」議長

2009年7月15日付書簡

給水管工事の停止について

西スマトラ州知事以下州政府幹部殿

われわれ「4ナガリフォーラム」に参集する民衆の苦境について報告したい。

農業省の調査では、1ヘクタールの水田は毎秒1.2～1.5リットルの水が必要である。すると、1470ヘクタールの水田には毎秒3675リットルの水が必要とされている。しかしながら、県派遣のチームとバライ・ウィラヤV長の調査によると、タリ・バンダルの水門での水量は、毎秒2480リットルである。

ルブック・ボンタの水源には、すでに二本の給水管が敷設されている。一本は水道公社用であり、もう一本は3社ミネラルウォーター会社用である。このことによって、すでに100ヘクタールの水田で影響が出ている。

われわれは7月2日にわれわれの希望を表明し、解決するまでは工事を一時凍結するよう要求しているが、県知事は一向に我々の主張に耳を貸さず、ナガリ長や郡長、それにPSDA（水源管理局）に対して事業継続の意思を表明している。このことはひとえに、県知事ムスリム・カシム氏の専横に基づくもので、関係各位に対して、この事業が民衆の生活を破壊しないことを切に願うものである。

「4ナガリフォーラム」議長

2009年8月3日付書簡

パダン・パリアマン県知事殿

要件：ルブック・ボンタから西スマトラ州パダン・パリアマン県ブンチャック・クランバンまでの給水管設置について

2009年7月30日付のバライ・ウィラヤ・スンガイ・スマトラV長と2009年7月14日付のパダン・パリアマン県知事からの二通の手紙を参照して、この問題は以下のように処理されることを望む。

1 表記の取水計画は、「4ナガリフォーラム」の反対もあり、まだ実施できる段階には至っていない。

2 水利水源長官は建設計画の策定に権限があつて、民衆との問題は地方府の責任で処理されたい。

3 将来のさらに大きな損失を防ぐために、2009年8月15日時点でも解決されていないことにかんがみ、「4ナガリフォーラム」との問題は至急解決されるよう望む。

公共事業省水利水源長官

2009年8月11日付書簡

2009年8月11日のパダン・パリアマン県指導者会議において、つぎのように決定されている。

シチャウン灌漑の水は、毎秒0.952リットルである。

この情報を「4ナガリフォーラム」は得ている。

「4ナガリフォーラム」議長

2009年8月11日付書簡

民衆からの告発について

西スマトラ州知事殿

拝啓

インドネシア共和国大統領は「4ナガリフォーラム」議長のアベル・タスマン氏からの7月15日付の告発状をすでに受け取った。内容は、ルブック・ボンタから流れるシチャウン川から取水した灌漑用水を利用している農民が、パダン・パリアマン県水道公社の計画する給水管計画によって大きな影響を被るので、その計画を中止するようというものである。

この問題は貴殿の管轄する権限内の問題ではあるが、現行法令に違反することのないよう注意を喚起する。

敬具

インドネシア共和国内務省
内務大臣（副）

2009 年 8 月 25 日
給水管工事の拒絶
公共事業省水利水源長官殿

関連農民は給水管事業を受け入れられない。

「4 ナガリフォーラム」議長

2009 年 9 月 14 日付書簡
民衆の不満について
バライ・ウィラヤ・スマトラ V 長殿

2009 年 8 月 11 日付の内務副大臣の手紙を受け、以下のことを通知します。

1 大統領はルブック・ボンタからブンチャック・キアンバンまでの給水管
工事を差し止めるよう訴えた「4 ナガリフォーラム」議長の手紙を受理して
いる。

2 上記の事項にかんがみ、中央政府に返答するために、われわれは貴殿に
対して、技術的な観点だけではなく、行政上の観点からも問題を解決するよ
う要請する。

西スマトラ州副知事

2009 年 9 月 15 日付書簡
給水管工事の差し止め
公共事業省水利水源長官殿

8 月 25 日付の手紙で申し入れをしていたが、県知事側は全くわれわれの
希望をくもうとはしていない。このままでは 1470 ヘクタール、5000 人の民
衆の生活が破壊されてしまう。ここは長官に強い行政処置をお願いしたい。

「4ナガリフォーラム」議長

2009年10月16日書簡

告発

西スマトラ州警察殿

過去の手紙等にかんがみて、われわれはパダン・パリアマン県政府がこれまでシチャウン灌漑用水問題について有効な処置を講じていないことを非難する。これ以降、この問題で生じるあらゆる問題は、県、州政府の側にあることをわれわれは宣言する。

「4ナガリフォーラム」議長